

A

鈴木静村書

雁將秋色來平野 鴉帶寒光過遠林 (梁潜)
雁は秋色を將て平野に來り、鴉は寒光を帯びて遠林を過ぐ。



B

概観

昇試漢字条幅でまず気付く注目点の第一は、草書の崩し方の間違い。草書体の崩しは、文字によっては一つの崩しだけではなく、いろいろな崩しがあるので、一般的なものを確実に覚え込むことが大切。画の接筆、回転、省略、点の有無等、細かいところを間違わずに覚えること。初めての草書体の場面へ必ず字典で確かめをモットーに――。



主な文字について

雁 〃 鴨〃 と同字。將 AB 旁に相違。色 A 末筆に点。平 A 墨継ぎ。二画目は点の意識。野 B 墨継ぎ。鴉 A 〃 鳥〃 の崩し、一般的。帶 A 草書、B 行書。寒 内部筆順 A 横縦横横、B 縦縦横横。過 墨継ぎ。〃 高〃 の崩し字典で確かめを。遠 行草共字典で確実に覚えること。

訳：雁は秋色をおびて平原におとずれ、鴉は秋の光をうけて遠い彼方の林を飛びゆく。

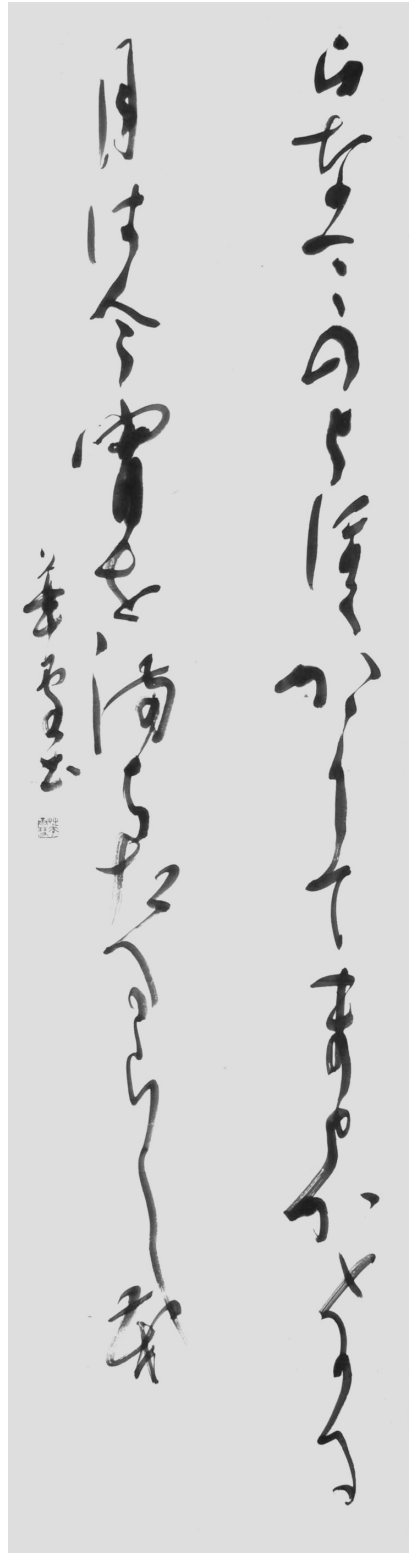
予告 (十月二十二日締切) 水能性澹爲吾友 竹解心虚是我師 (白楽天)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

A

平岡華雪先生書

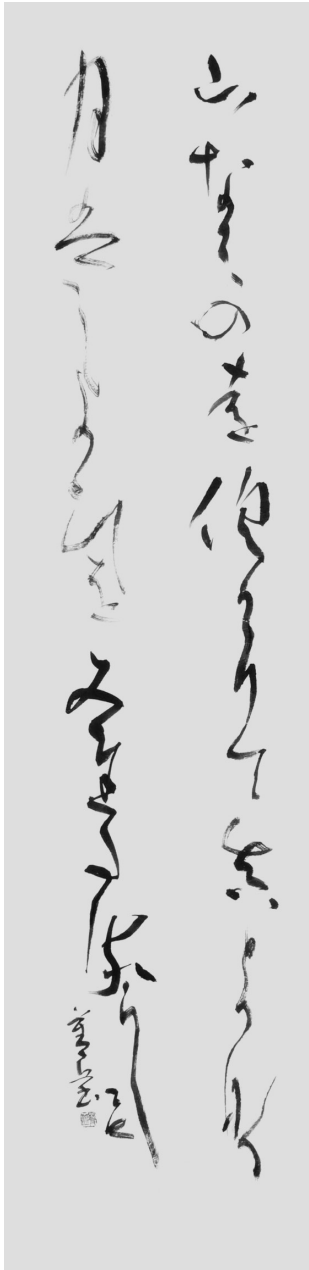
山脈のとはくかかりてまどかなる月は今宵を満ちたるらしも (松村英一)
山な三のとはくか、りてまどかなる月は今宵を満ちたるらし茂



B

北島菁丘先生書

山な三の遠俱可りて真ど可那る月盤こよひをみ遅多流らし毛



学 び 方

今月は昇試課題とあってオーソドックスな二行書きにしました。出だしを静かに「遠俱」で変化を表現する為に幅を出して字画を多くし、「可、り」で細く締めて圧をかけ、二行目の「月」は山家心中集によく出る「月」をとり入れました。「盤こよひ」は一行の放ち書きに響かせる様に連綿を用い、「ひ」に「を」を絡ませて纏綿させ、結句は「遅」で密にして締めました。

筆の開閉が効かないと流れが単調になりますので、字の大小・太細等圧の変化が必要です。線は書くのではなく「引く」事が大切と思われまます。古典から学びとれる転折の厳しさ、潤渇による景色の美しさを糧に創作力を高めて実力をつけましょう。

予告 (十月二十二日締切)

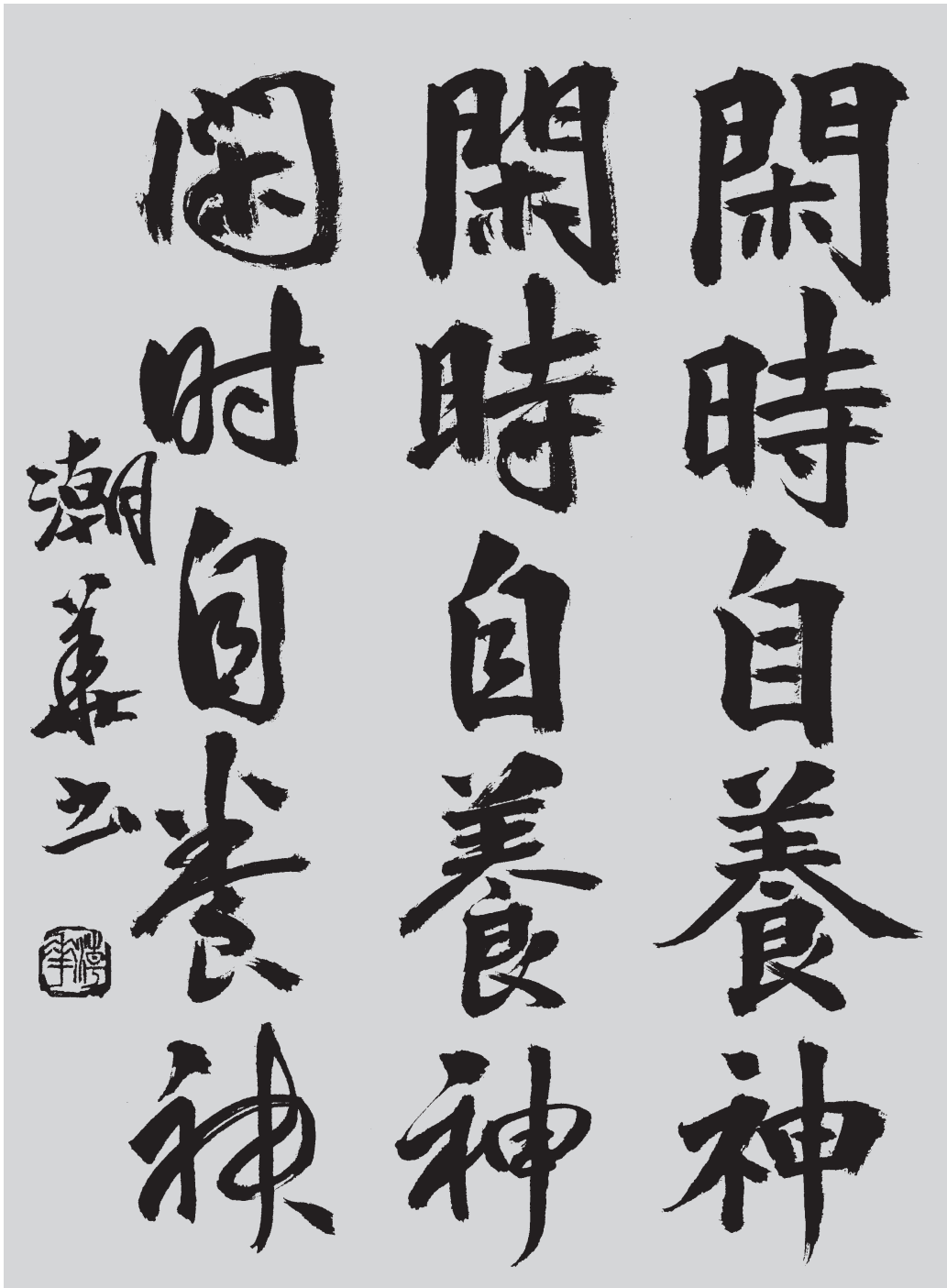
秋萩のさきちる野辺の夕露にぬれつゝきませ夜はふけぬとも (新古今和歌集)

明治二十二年に生まれた松村英一氏は、窪田空穂選の十月会に参加し、合同歌集「白露集」「黎明」に参加して自由主義思想の洗礼を受け、多彩な展開を遂げた歌人。牧水らの試行と重なる破調歌を試み、短歌結社誌の経営にあたるなど万葉調を基調とした写実的詠風を確立。昭和期に入り旅行詠山岳詠を中心に、晩年は孤愁を深めた老の歌をなした。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

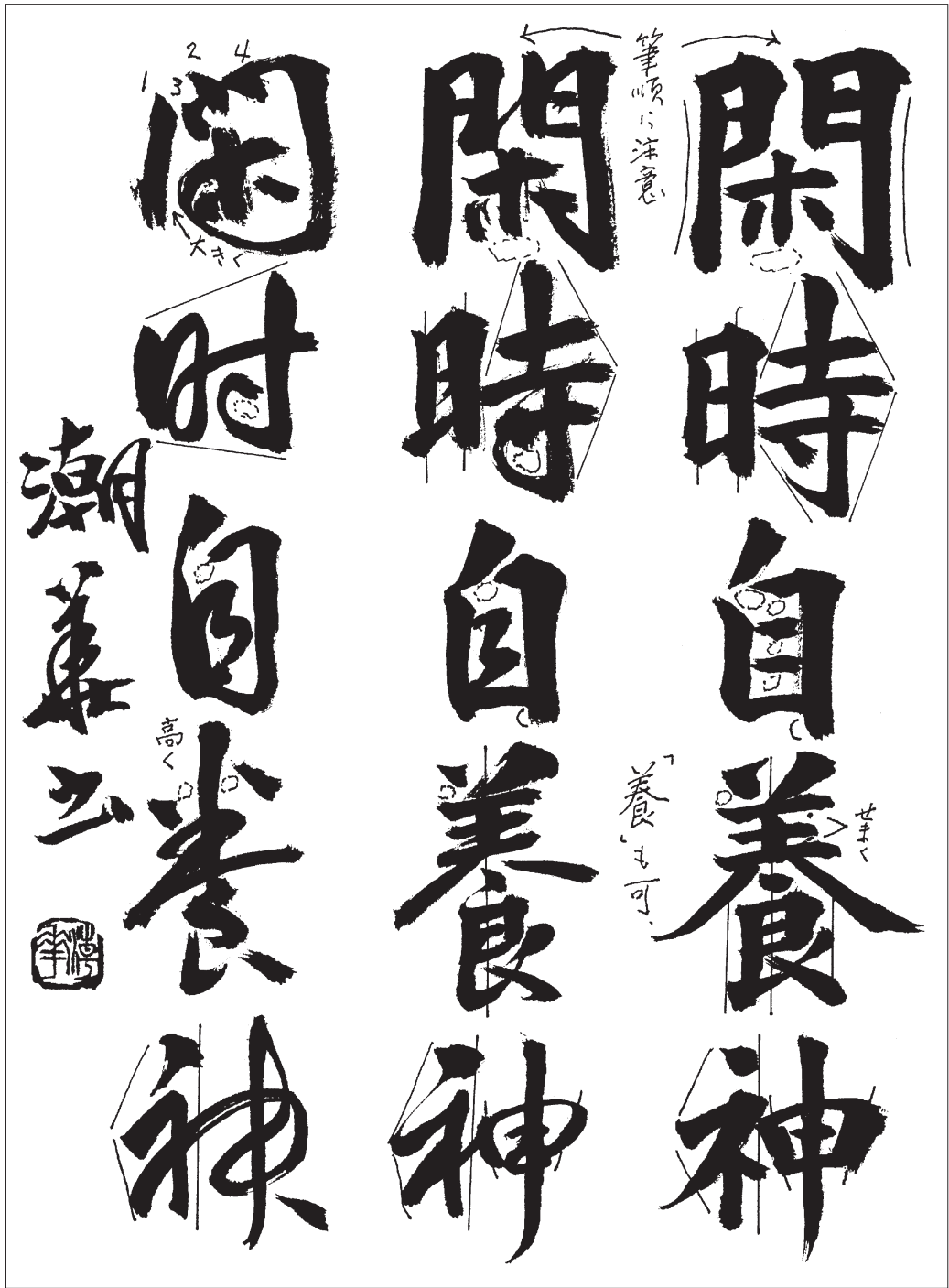
水貝潮華先生書

閑時自養神（周憲王）
閑時自ら神を養う。



訳…余裕のある閑暇の時に、自ら其精神を養い以て他日の用を待つ。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。



高塚竹堂先生書

ききそめし秋にもましてさびしきはみぞるる暮の雁のひと声(香川景樹)

ききそめし秋にもましてさびしきはみぞるる暮の雁のひと声

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

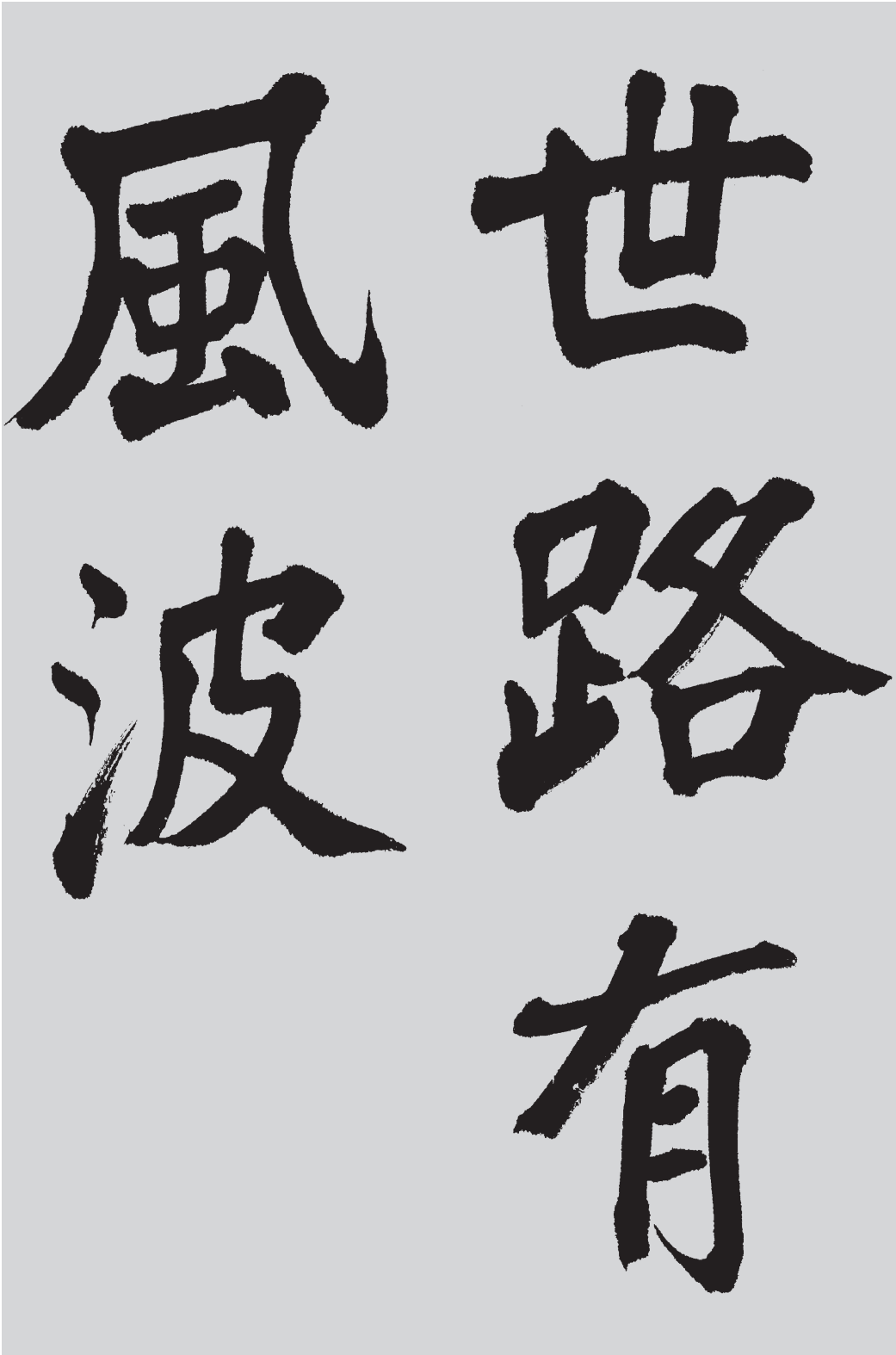
構成分析として
右群構成のポイントは

初句を大きく(疎)
や、行間をとつて
二行目二句を順次密に、
「さ、ま」の字つせが注目
点、ここで華縮すると
右群心の難点。大きく余白をとつて左群へ、「こ、こ、こ、こ、こ」
に對してや、行間慎重に。「こ、こ」の添え方は全体の
としてより慎重を期せよように。

○ ○ ○
↓位置は全体をみて

平岡華雪先生書

世路風波有り。(彭炳)



訳…この世を渡るには波荒れ風吹き容易なことではない。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

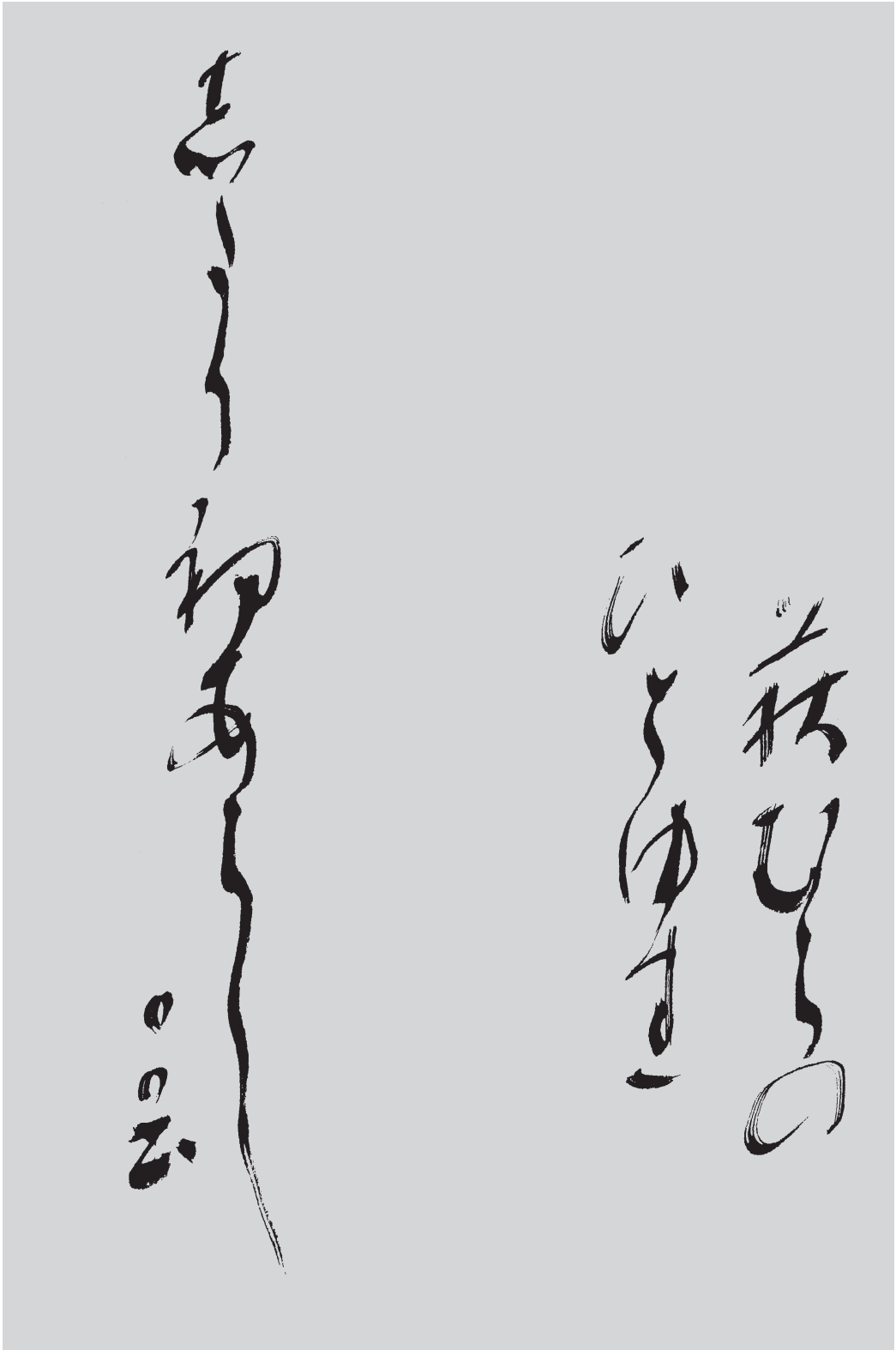
風、世、波、踏、省の書法分析図。各文字の筆順と特徴的な筆勢を示している。

風：強く 背勢
 世：末画で締める
 波：強く
 踏：強く
 省：かまく、止める

主なポイントについて
 ○世、形のとりにくいな字、末画
 が余白を均等に削る。
 ○路、右行の中心字、右折は
 のりだに。
 ○風、風揺る「背勢」に。
 ○波、系偏と右折の大切。

平岡華雪先生書

萩むらのひとゆれしたり初あらし (越央子)



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

基礎・基本について

百祥二行、左祥は一行に落款の指図。墨迹は左祥の「初」と見る。

特に初歩段階者に留意して

点は、まず単体による筆意、字形の確かな把握。本文の連綿に入ると、単体練習で一字を消化し印してほしこと。例えは、「む・ら・い……」。漢字面をいふは、初・初へのユキ書体。ある程度の自信をもって、連綿に移るとが大印。単体というより、基本練習に徹して行くべきところがある。



クイックのリズム

軽く置く気持ち

腰は小さく

上の字

路川千曄先生書

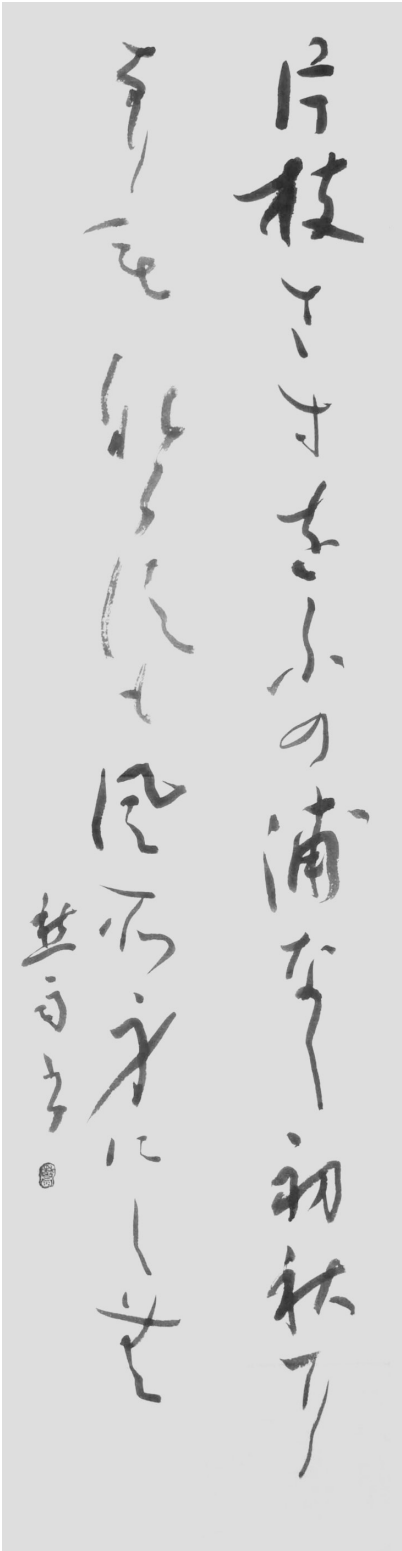
残月猶催蛩語切 秋風頻送馬蹄輕 (吳學炯)
残月猶催蛩語を催して切に、秋風頻りに馬蹄を送って軽し。



訳：夜明けの月は白く残りなおおろぎに鳴けよと促すが如く、秋風は朝早く旅立つ馬を送って軽快である。

加藤愁雨先生書

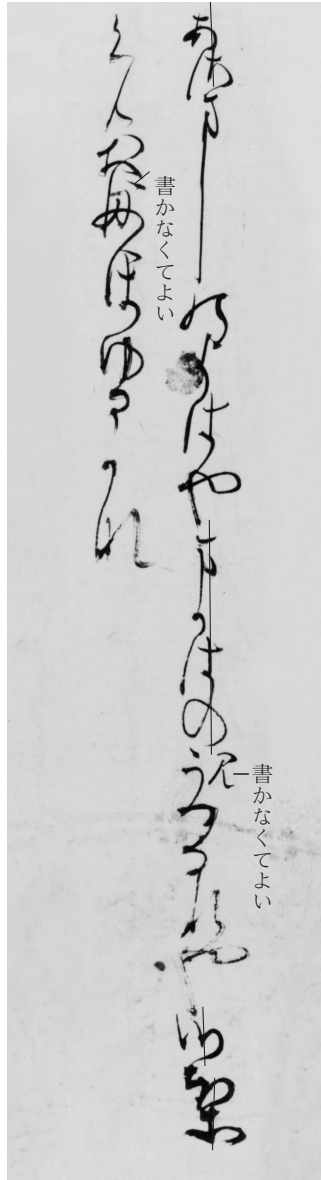
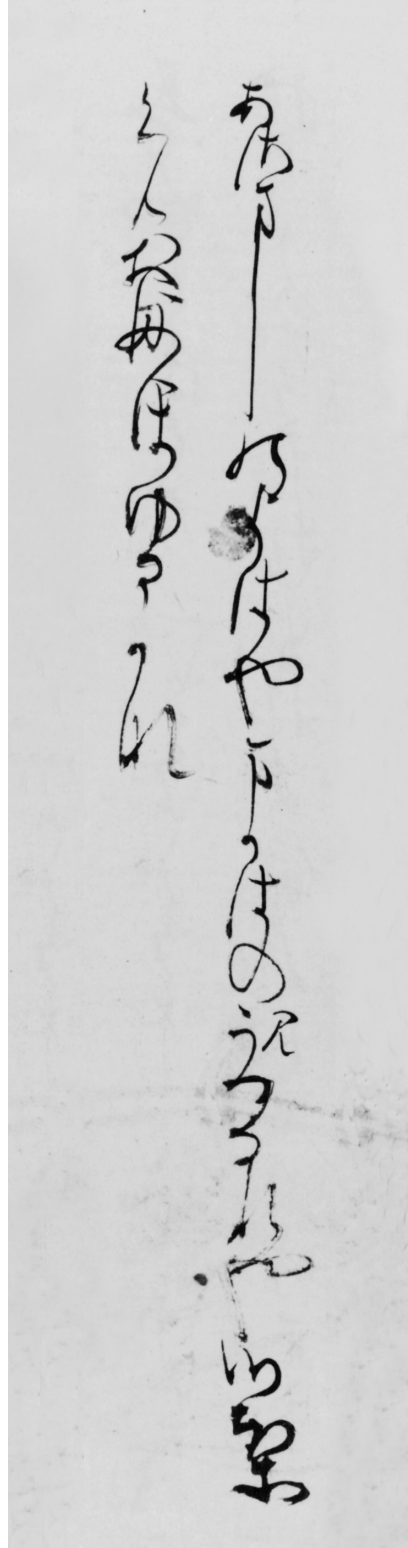
片枝さすおふの浦なし初秋になりもならずも風ぞ身にしむ (新古今和歌集 宮内卿)
片枝さすをふの浦なし初秋に奈り毛那ら須も風所身にし無



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

石原春香先生担当 和泉式部続集切 伝藤原行成（日本書学大系・法書篇）

※条幅臨書部は出品料無料です。



あさましのよはやまかはのうづなれや
心こころばそくもおもほゆるかな

あ佐万し能よはや万可はのうつ奈れや
心本所く无お母ほゆる可那

〈学び方〉

「あ佐」は中心移動から「し」へと進み美しいながれを演出。「万可はの」は左へ流れかすれへすすむ。「心本所」は曲線を伴った直線によりぐる様な線がおもしろい。「お母ほ」はつめて。「ゆる可那」で間をとる。リズムカルに筆を動かして書いてみましょう。

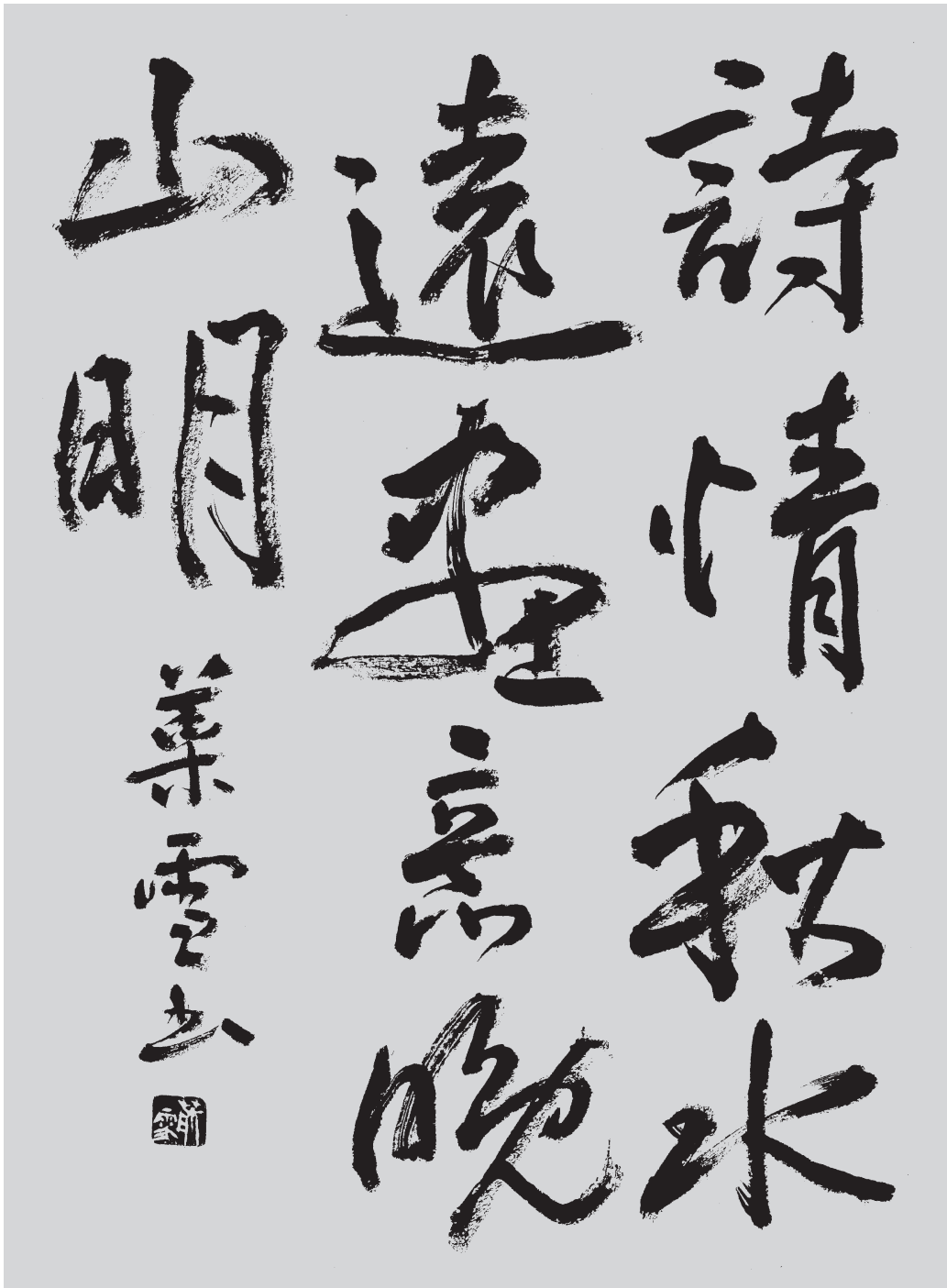
〈臨書〉

臨書はまずは自分を入れない絶対模倣から入ります。字形を覚える・文字の大小・外形・線質・リズム・連綿法・行間のひびき・墨法などの技術を修得し、意臨・背臨へと進み倣書へとチャレンジしてほしいです。そこから創作となり作品が生まれます。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

藤 江 菜 雪 先 生 書

詩情秋水遠 畫意晚山明（沈石田）
詩情秋水遠く、画意晚山明なり。

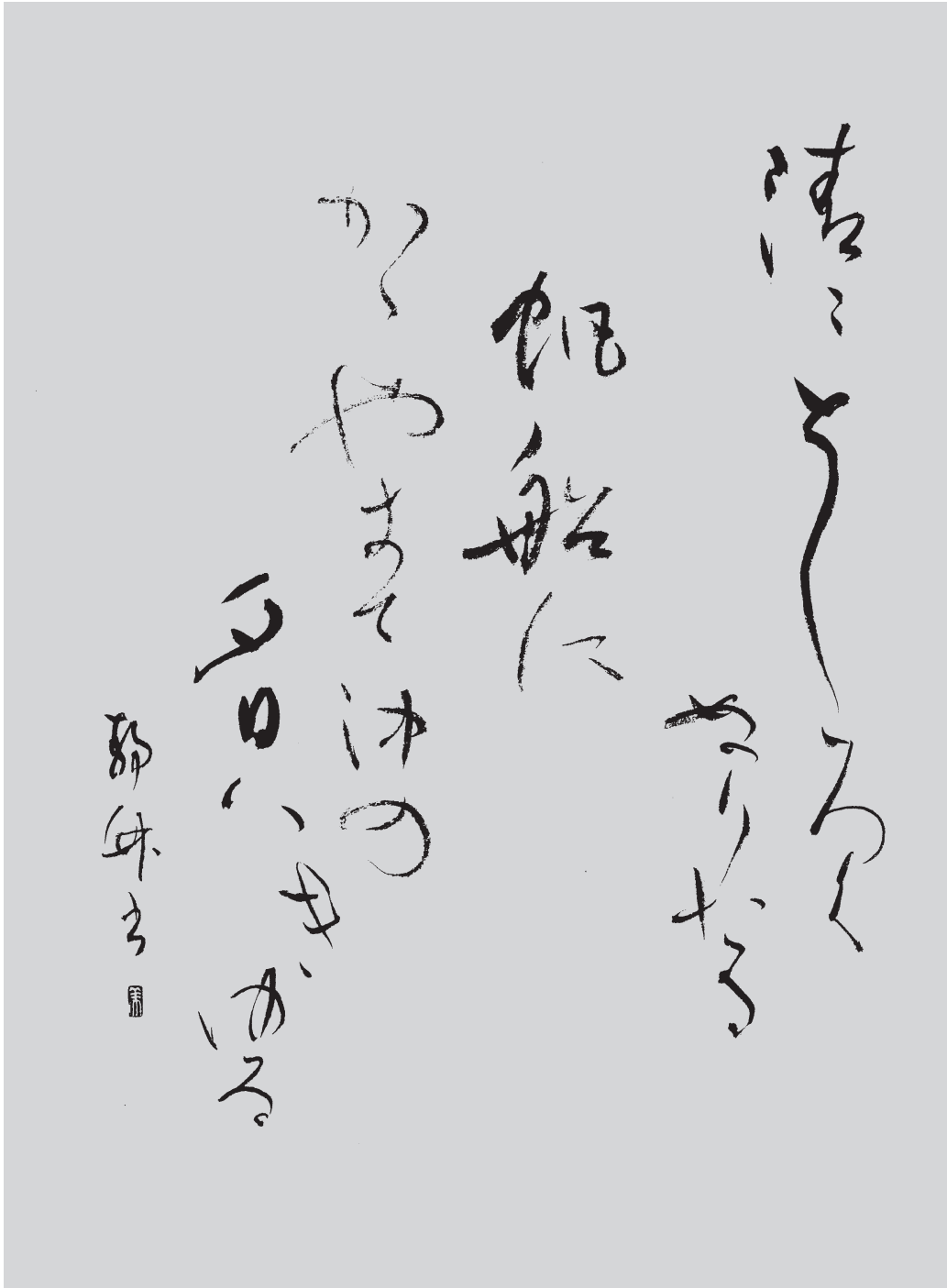


訳：詩の情は秋の水と共に幽遠に、画のころは夕暮の山と共に明かである。

◆注 意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

鮎川静竹先生書

清々と白くぬりたる帆船にかがやきて沖の夕日は消ゆる（土屋文明）
清々としろ久ぬりたる帆船にかゝや支て沖の夕日八きゆる



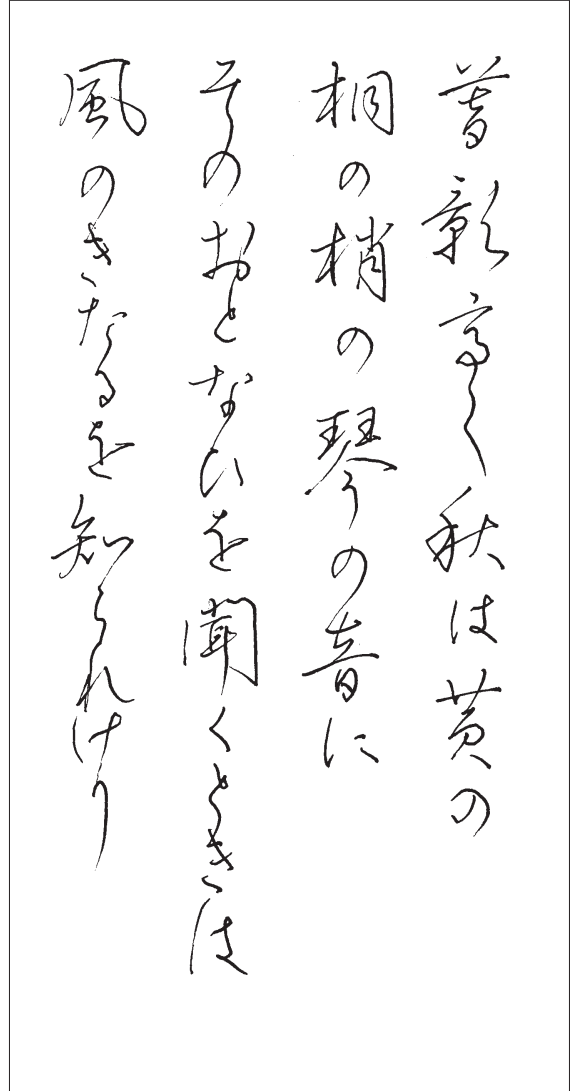
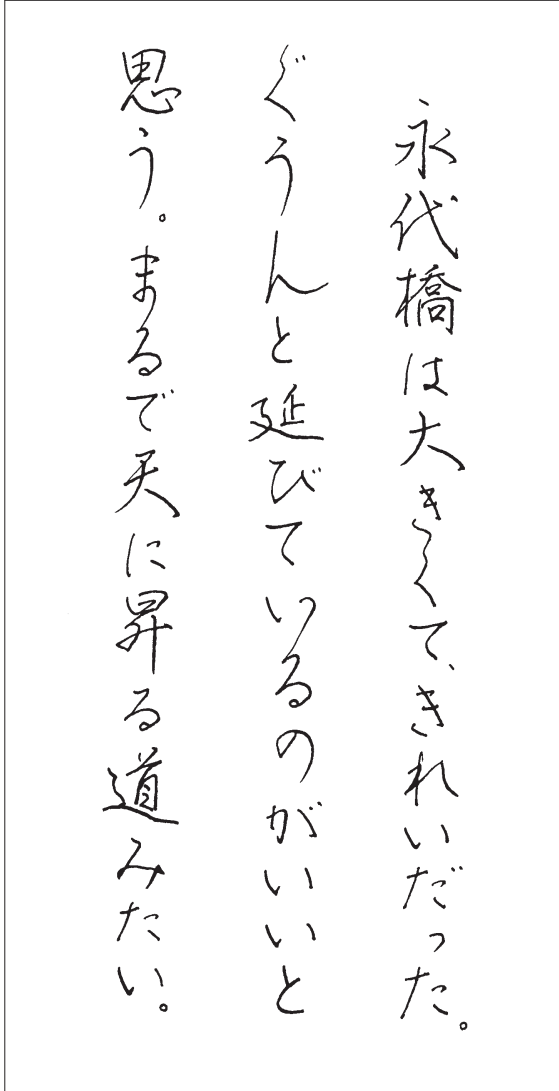
◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

湯澤春翠先生書

路川千曄先生書

課題2 (初段格以下)

課題1 (初段以上)



課題1 (初段以上)

暮影高く秋は黄の
桐の梢の琴の音に
そのおとなひを聞くときは
風のきたるを知られけり

「秋風の歌」より 島崎藤村

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (4) ⑤ 会員は無料・会員外は四〇〇円
- (6) 添削希望者は直接担当の先生にお申込下さい。(返信用封筒に自分の住所・氏名を記入し、切手を貼って同封のこと)。

課題1 六〇〇円
課題2 三〇〇円

課題1 路川千曄先生 〒二〇七〇一三
東大和市向原五ノ一〇九一ノ四
課題2 湯澤春翠先生 〒三七一〇二六
前橋市城東町一ノ二九ノ五

課題2 (初段格以下)

永代橋は大きくて、きれいだった。
ぐうんと延びているのがいいと思う。
まるで天に昇る道みたい。

「橋をめぐる」橋本 紡